

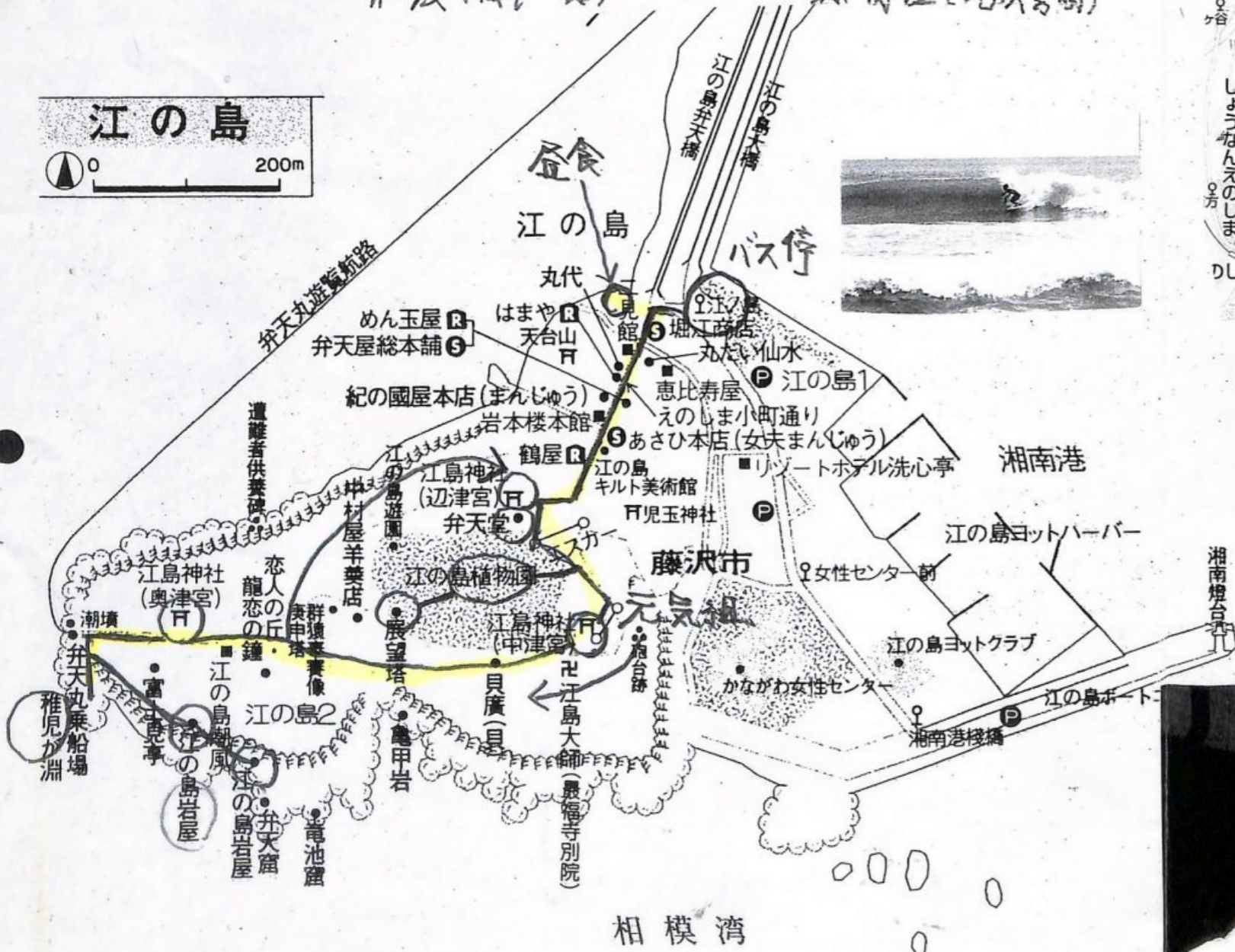
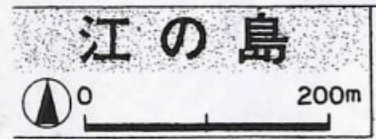
17. 11-26
05



弁度(松平健)



源義経(滝沢秀明)



相模湾



群(石原さとみ)と義経



北条政子(財前道見)と源頼朝(中村錦之助)

4) 小動(こゆるぎ)神社(遠望)

- ① 元弘3年(1333)5月、新田義貞を大将とする鎌倉倒幕軍は破竹の勢いでこの道を鎌倉をめざした。17日朝第1陣は腰越に火を掛けて通過、夕方には化粧坂まで達したが反撃にあう。この日、義貞は七里が浜を見下ろす現在小動神社の地に本陣をおいた。
- ② 小動神社は源頼朝の家来佐々木盛綱が創建、新田義貞が中興という。神社境内の展望台に立つと眼前に相模湾が広がり、海岸線は鎌倉につづく。かつての難所もいまは江ノ電と国道134号線が数秒で通りぬける。神社前の道路は交通量多く危険なため遠望とする。

5) 龍の口刑場跡

- ① 鎌倉幕府の刑場で日蓮法難の地として知られる。中近世では都市の町外に刑場が置かれた。
- ② 文永8年(1271)既成宗派を厳しく攻撃した日蓮は、幕府の反感をかって捕らえられたが、処刑の日、光玉が飛来、目がくらんで切れなくなったとされる。しかし、執権北条高時の夫人の懐妊がわかったので罪一等を減じられて佐渡流罪になったのが真相らしい。
- ③ 龍の口刑場跡碑、御一泊の霊窟
- ④ 毎年9月、日蓮法難記念法会のぼたもち供養=刑場に向かう日蓮に、腰越の里に住む栈敷の尼がゴマぼたもちを差し上げた故事にちなむという。

5) 龍口寺

- ① 日蓮宗、寂光山。日蓮が処刑されそうになった龍の口刑場に弟子日法が庵を結び、慶長6年に寺として整備された。
- ② 大堂は文政元年、山門は安政5年造営、大書院も江戸時代後期で松代御殿の移築。みごとな彫刻類に注目。五重塔、妙見堂、鐘楼。仏舎利塔、展望台周辺は工事のため立ち入りできない。

6) 京浜バス龍口寺バス停留所から移動

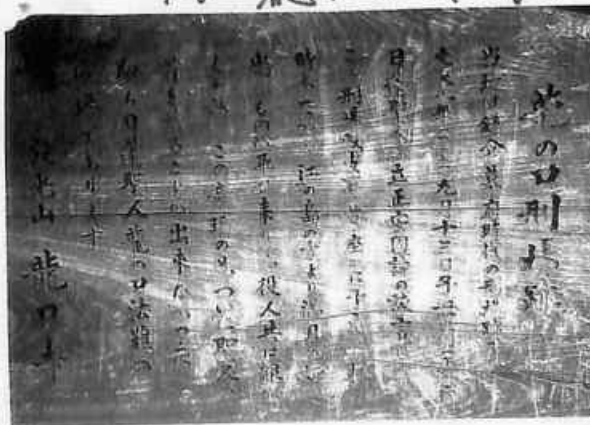
江の島行き11時11分発(または27分、43分発)およそ10分、江の島着



↓ 龍の口刑場跡



↓ 龍口寺



7) 江(絵)の島(県指定史跡、名勝)

- ① 藤沢市南東はじ、相模湾に浮かぶ緑の島。その風光は絵のように美しいことから名付けられたという。観光地として人気が高い。面積0.3km²、周囲4km、最高高さ61mの小島。
- ② バスで通過する江の島大橋の右は片瀬海岸で左は東浜、夏は海水浴場で賑わうが、オフシーズンはウインドサーフィンのカラフルな帆が海原を走り、ジェットスキーがエンジンの音高らかに走り抜ける。
- ③ 江の島参道入り口で下車。大橋と相模湾を見渡す近くの小公園で昼食。昼食か所周辺には磯料理の食堂多数あります。せっかくですからご希望の方はどうぞ。

8) 江島神社(へつのみや)、中津宮、奥津宮

- ① 参道はみやげ物屋や名物のまんじゅう店、磯料理の食堂が続く。ゆっくりと周囲をながめながら前進、まもなく朱塗りの鳥居とその先に龍宮城を連想させる端心門がある。門をくぐって石段を登ると江の島神社の江島神社前になる。
- ② ここで自由行動後を考えて 元気組は階段を登る(無料) 自信のない人はエスカー利用、植物園、展望台共通券(800円?)が便利。
- ③ 社伝では6世紀中ごろ創建という。寿永元年(1182)源頼朝が諸社殿を建立、弁財天を勧請して「江の島弁天」として有名になった。鎌倉時代は武士が、近世は東海道を旅する庶民の信仰の場として興隆した。
- ④ 3社殿は江戸時代の建物で、奥津宮の石鳥居は源頼朝造営といわれる。
- ⑤ 江島神社で15分ほど自由行動。希望者は奉安殿(拝観料150円)の鎌倉時代作「裸弁天」を拝観、白い美肌に琵琶を抱える。



↑ 江の島大橋



にぎやかな参道 ←



江島神社



↑ 龍宮内



← 裸弁天



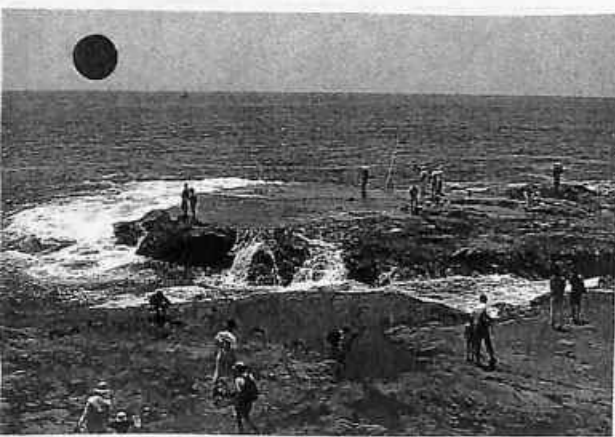
↑ 奥津宮

- 9) 稚児(ちご)が淵、江の島岩屋=元気組
- ① 奥津宮先の急な坂道を下りたところが稚児が淵。海水の浸食と隆起で海面に現れた、幅50mほどの岩原がベランダ状に広がっている。「かながわの景勝50選」の1つで、波が砕け散る景観と富士山の遠望はすばらしい。
 - ② 岩屋は断崖にぽっかり口をあけた海蝕洞窟。江の島信仰の発祥地で役の行者、弘法大師、日蓮聖人などが修行した地といわれる。2穴あるが中は暗くろうそくの火で奥へと進む。希望者のみ。拝観料500円。

- 10) 江の島植物園、展望台=足に自信のない方
- ① 元江島神社の供御菜園で明治はじめ英国人コッキングが買い取って庭園にしたのが始まりで昭和24年藤沢市立植物園となった。
 - ② 展望台は高さ53m、富士山や箱根、相模湾の眺望が楽しめる。

- 11) バス停江の島集合、15時05分鎌倉駅行き乗車
- ① 万バスに遅れた場合は鎌倉駅行き16時00分(腰越から江ノ電に乗車)
 - ② 鎌倉駅周辺で自由行動、お買い物、散策をお楽しみください。
 - ③ 鎌倉16時53分発(君津行き快速先頭車両)乗車、例会どおり人数の確認は行ないません。早帰り、遅帰り自由とします。

バス運行状況により
小動が江ノ電腰越に乗りお
こまがおります



← 稚児が淵 ↓



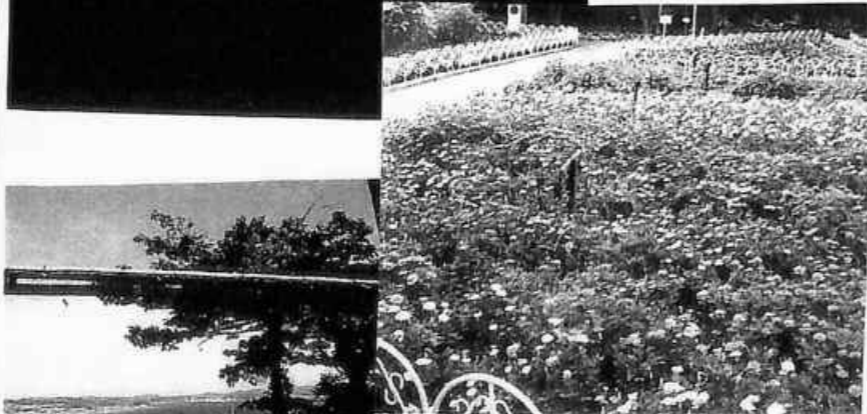
← 展望台



→ 江の島岩屋



← 展望台から
の景色

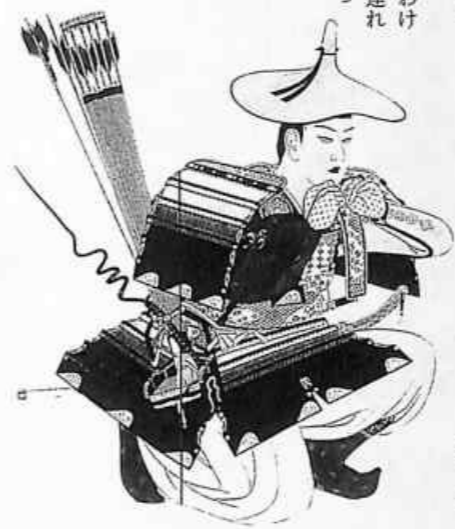


← 植物園



源九郎義経、推参!
兄・頼朝と感激のご対面

義経は幼名・牛若丸。生まれた年に平治の乱が起り、父義朝は横死、母は幼い3人の子を連れて大和に隠れたが老母が捕らえられていたためやむなく京都へ戻った。その後、牛若丸は7歳で鞍馬寺の東光坊阿闍梨の弟子になったといわれる。16歳で山を下り、元服して九郎義経と名乗り、平泉の藤原秀衡を頼った。そこで、じつと源氏の再興の時期を待っていたのである。そして、ついにその時が来た。異母兄である頼朝が挙兵をしたのだ。義経は秀衡に参陣を止められたが密かに平泉を抜け出して、黄瀬川(現・静岡県沼津市)の陣に頼朝を訪ねる。素性を怪しまれてなかなか取り次いでもらえなかったが、頼朝自身がその年頃から弟ではないかと考え、ようやく面会を果たすことができたのだ。兄と弟、感激の対面である。



陣中の源頼朝(右)と兄弟の対面を果たした源義経(左)。(ともに安田毅彦画「黄瀬川陣」より部分。東京国立近代美術館蔵)

しかし、大軍を率いているわけでもなく、わずかな従者しか連れていない義経は、頼朝にとっていわば御家人の1人。なんの特別扱いも必要ない。一方の義経にすれば、自分は家臣でなく弟だという特別な思いがある。

諸将も感激したという兄弟の対面であったが、この気持ちの温度差は、そのままこの兄弟を宿命づけるものであった。



稀代の策士、後河法皇
頼朝・義経兄弟の分断に成功

源平合戦の英雄・源義経は、軍師としては突出した天才であった。しかしその若さゆえに、自信過剰で個人プレーばかりが目立つお調子者でもあり、為政者としてははなはだ未熟である。朝廷に君臨する古狸・後白河法皇にとって、そんな義経を龍絡するなど、赤子の手をひねるようなものであったろう。法皇は義経の数々の戦功に対して、検非違使左衛門少尉に任命し、ついには院内の昇殿を許すなど、破格の待遇を与えるのである。



こうした義経の異例の出世に対し、兄・頼朝は激怒する。そもそも、御家人(頼朝と主従関係を結んだ者)の賞罰についてはすべて、武家の棟梁たる頼朝が掌握するはずであった。それを、頼朝の京での代理人である義経自らがこの原則を破り、頼朝を無視して法皇か



兄・頼朝への詫び状「腰越状」
義経の思い届かず逆ギレ挙兵



兄・頼朝の怒りを解くために義経が書いた腰越状。義経は腰越の満福寺に逗留(とうりゅう)し、この手紙を書いたと伝えられている。(満福寺蔵)

1185年(文治元年)3月、壇ノ浦(現・山口県下関市)で平氏潰滅という快挙を成し遂げた義経だが、平宗盛ら捕虜を従え東国に下ったものの、頼朝から鎌倉入り拒絶される。同合戦に従軍していた梶原景時の讒言や、義経が平時忠の娘婿になったことなどが耳に入り、頼朝の逆鱗に触れたのだ。そこで相模国(現・神奈川県)腰越の宿から、頼朝の側近・大江広元に手紙を出す。兄の誤解を解くよう仲介を依頼した「腰越状」である。

しかし、義経の切々たる思いは頼朝に通じなかった。自暴自棄になった彼は京に戻り、後白河法皇より頼朝追討の院宣(上皇・法皇の命令を記した文書)を受け、このことになる。こうして、2人の対立は決定的となった。

ら官位を授かったのである。以後、次第に頼朝と義経の関係は気まずいものになっていく。

これこそが、後白河法皇の狙いであった。武家勢力が結束することによって、堂々と築き上げてきた公家政権の歴史に終止符が打たれることを警戒した後白河法皇。彼の老練な分断策によって、2人の血を分けた兄弟は、骨肉相食む戦いと突き進まざるを得なくなるのである。

08全次回の予定
3月10の土日 土浦城と芝の城下を歩く
5月23 日曜バスで松代城と龍岡城を歩く